竹林整備の必要性学ぶ

獣がい対策実践塾

伐採しランタン作りも

鳥獣被害対策の将来を担う若者や関心のある市民がその現状や対策を学ぶ「獣がい対策実践塾」（丹波篠山市主催）がこのほど、みたけ会館などで開かれた。5回講座の3回目。市民や、篠山産業高校、篠山東雲高校の生徒計12人が受講。野生動物の潜み場をなくすための竹林整備について講義を受けた後、実際に竹林に分け入って竹を伐採したほか、受信機を使ったニホンザルの位置探索実習を行い、獣害対策への学びを深めた。

講義は、氷上高校臨時講師で、竹の利用価値を創出し、竹林整備などを通じて地域内外の交流を進めている　さん（26）が行った。

さんは、丹波篠山市内には約2000カ所、約230㌶にのぼる竹林があり、現在も微増傾向にあること、また、その半分以上が放置されていることを報告。竹は地下茎で増え、竹やぶは一年間で5―8㍍も広がるほど旺盛な繁殖力があることを説明した。

また、竹はもともと人が利用しやすいよう、人里の近くで管理していたため、「竹林は、里と山との境界の最前線に位置する」とし、「そこが放置され、獣の潜み場になると、田畑との距離も近いので農作物の被害につながる」と解説した。

竹林管理のノウハウとして、▽枯竹や倒竹などを除去▽傘を差しても歩き回れるくらい間伐する▽田畑と面している個所は、竹林側に1―2㍍刈り込み、境界線（バッファゾーン）を造る―などを挙げ、伐採した竹は、竹炭や肥料といった農業資材などに利用できることも紹介した。

講義後は、和田の竹林で、モウソウチクを数本伐採してランタン作りなどを楽しんだ。さらには、発信機（首輪）を付けたニホンザルの位置を、アンテナ（受信機）をかざして探る探索実習も体験した。

同実践塾ではこれまでに、獣の生態や被害防除法、獣害柵点検などを行った。今後、年末までに箱わな捕獲やジビエ料理などを体験する。

伐採したモウソウチクを玉切りする参加者＝丹波篠山市和田で

阪下さんの講義「野生動物の潜み場をなくすための竹林整備と実践」に耳を傾ける受講者＝同市瀬利で

2025年10月5日
丹波新聞